

序論 美学、この不純なる領域

美学とは何か。

本書は、このいささか大仰な問いに対して、原理的ではないしかたでの応答を試みるものである。原理的ではないしかたで、というのは、美学とは何かという定義を問うのでも、美学とは何であつたかという歴史を問うのでもなく、美学がいかなる実践プラクティスであるのか——という、そのひとつのケース——を、わたしがこれまで公にしてきた複数のテキストを束ねるかたちで示すということである。

美学とは何か。そのもつとも簡潔な定義は、「美」「芸術」「感性」を対象とする哲学の一分野である、というものだろう「1」。わたしもまた、ごく一般的な問いとして「美学とは何か」と問われたなら、まっさきにこの定義を挙げることを常としている。とはいえ、これは美学の最小の定義になつてはいるものの、そこにいまだ不十分なところが残されることもたしかである。

美学の対象がもつばら「美」「芸術」「感性」の三つとされている直接的な理由は、この学問分野の命名者であるA・G・バウムガルテン(二七四—二七六)と、おもにヨーロッパにおけるその後の伝統に由来する「2」。むろん、それから約三世紀が過ぎた今日にいたるまで、この学問分野は時代や地域によつてすくなくならぬ変遷をこうむつてきた。それにもかかわらず、美学がこの——大いに次元を異にする——二つの

対象をもつということは、ほとんど疑われることがなかったように思われる。すなわち美学とは、(1)観念のないし具体的なものとしての「美」を、(2)人間によるさまざまな制作物のうち、もつとも際立ったものとされる「芸術」を、(3)さらには美や芸術にとどまらず、われわれの認識一般に不可欠な「感性」を哲学的に問う学問分野である、というのが——専門家・非専門家を問わず——今日にいたるまでの常識でありつづけている。

こうした定義に異論があるわけではない。ただし、ここにはいくつか考えるべき事柄が含まれているように思われる。

まず、これはあらゆる哲学的思索に言えることだが、こうした営みには「具体的事象」と「抽象的思弁」とのあいだの往復が欠かせない。哲学の一分野に属する美学もまた、観念的な美と具体的な美のあいだで、あるいは「芸術とは何か」をめぐる分析的な考察と、そこにかならずしも回収されない特殊な現実とのあいだで、たえずおのれを宙吊りにしながら思索を続けることを常態としている。しかし、なまじ「美」や「芸術」という領域に関わっているためか、こと美学にかんしては、そのような往復運動そのものに、たえず懐疑的な視線が注がれてきたことも事実である。

この話題においてしばしば引かれる、カントの言葉を見ておこう。

美しいものについての学問はなく、あるのはただ批判だけである。また、美しい学問というものは

なく、あるのはただ芸術だけである [Es gibt weder eine Wissenschaft des Schönen, sondern nur Kritik, noch schöne Wissenschaft, sondern nur schöne Kunst]。 [3]

美学の最大の古典である『判断力批判』(二七九〇)に、こうしたパラドクスが見られることはつとに知られる通りである。つまり、カントにとって「美しいもの」は一回かぎりの「批判」の対象にはかならず、それは客観的な証明根拠を必要とする「学問」の対象にはなりえない。同じく、学問一般があくまで証明根拠を求めるものであることに鑑みるなら、「美しい学問」——表層的に考えるなら、洒落た言葉づかいに終始するだけの学問——というのは、おのれの性格に根本から抵触するものだろう。

美学は、そもそものはじめから、このカントの呪縛のもとにあった。すなわち一八世紀以来、ひとつの学問分野としての美学に携わるものは、「美しいものについての学問」でも「美しい学問」でもないかたちで、いかにそれを成立させるかという課題に取り組んできたと言つてよい。というより、カントに忠実であろうとなかろうと、およそこそうした葛藤なしに美学という営為が可能であるとは——すくなくともわたしには——思われない。

それゆえにと言ふべきか、美学はほとんど必然的になしかたで、本来ならばフィールドを異にする美術批評と交わることもなった。そのような交差は、美しいものについての「学問」ではなく、あくまでその「批判」であろうとしたという意味では、カントの言葉に忠実であったと言つてよい。しかし、それも

大抵は冷ややかな視線にさらされるのみであつた。かのポール・ヴァレリーによる「美学についての演説」(一九三七)は、それが美学・芸術学国際会議の講壇から発せられたというインパクトにこそ目をみはるべきではあるが、そこで吐露されているような「美学」への不信感は、さほど珍しいものでもない。

わたしは次のように考える――。

およそ説明しがたい、ある快の形式というものが存在する。境界を定められることもなく、それを生み出した感覚器官にも、感性の領域にすらも閉じ込められることなく、人、場合、時代、文化、年齢、環境によつてその本性、契機、強さ、重み、結果を異にし、社会全体に不規則に散らばつた個人をさまざまな行動へとおもむかせるような、快の形式というものが。その行動は、普遍的に妥当する原因などもたず、いくつもの不確実な目的にしたがつている。そして、これらの行動はさまざまなものを生み出すが、それらの使用価値と交換価値は、それが何であるかにはほとんど左右されることがない。そして、最後の否定として次のことがある。この快および生産物を定義し、整理し、規制し、測定し、安定させるための、あるいはそれを確実なものとするためのあらゆる労苦は、これまでのところ無駄であり、まったく得るところがなかった。しかし、この領域ではいかなるものも境界を定めることができないので、それらの労苦も完全に無駄であつたとは言えず、それらの失敗も、時として奇妙に創造的であつたり、生産的であることをやめな

かつた……。〔4〕

この詩人ならではの洗練された言いかたではあるが、ここに見られるのは、「美学」という営みへの根本的な異議申し立てである。聴衆に気を遣つてか、この直後でヴァレリーは、美学そのものが「否定の体系」であると言いたいわけではない、といったん言葉を継いではいない。だが、この人物はふたたびそれをくつがえすかのように、こうした指摘にも「抹の真理がある」とすかさず追い打ちをかけることを忘れない。

その本音がどこにあったのか、いまとなつては詮索の必要すらないだろう。われわれは、ヴァレリーが『カイエ』において、色あせた一室で美について語る「醜い美学者」への揶揄を書きつけていたことを知っている〔5〕。ヴァレリーにとつて、美はあくまで「説明しがたいもの」であり、それを捕まえようとすると美学なる営みに、この詩人はついに冷淡な姿勢を崩すことはなかった。

とはいえ真の問題は、こうした疑念がひとりヴァレリーのものではなく、時代や地域を問わずそれなりにひろく見られるものであることだ。では、こうした美学における「居心地の悪さ」は、いったいどのようなところに起因するのか。そして、こうしたステレオタイプに抗する方法として、いったいどのような戦略が考えられるのか。本論への予備的な考察として、ここから先ではしばしばこの問題について考えてみたい。